「今日の説教、聴き手のために」　　2006/4/2　明治学院教会(26)

岩　井　健　作

「自分の十字架を負う」

マタイ、１６章２１節～２８節

１、福音書の分水嶺。川の流れが、一方は太平洋に、もう一方は日本海に。この「分水嶺を越える」感覚を「受難予告の物語」を読む時覚える。福音書はマルコ福音書が一番先。マタイ、ルカは、その改定新版、あるいは地域版。細部のバリエイション（変化）はかなりあるが、骨格部分の構造は似ている。「イエス、死と復活を予告する」物語はマルコ、マタイ（16:21/17:22/20:17)、ルカ共に３回でて来る。福音書におけるピリポ・カイザリアの位置付け。イエスのガリラヤの宣教活動とエルサレムへの受難に向う分水嶺。「教え」と「実践」の分水嶺。貧しい者、病める者と共にあることから、それを阻む力に真向から立ち向かうイエス。

２、「弟子たちに打ち明け始められた」(21)。「始める」は「最初の段階」を意味する。蒸気機関車の動輪の最初の駆動のように重い。イエスが弟子たちに死のことを語る重さ。一切を捨ててイエスに従った弟子の召命への再理解を促しいている。「自分を捨て自分の十字架を負うこと」への新たな招き。

３、「必ず・・・・ことになっている」(21)。「神の必然」とも言うべき初代教会の強い確信。受難と十字架の死と復活というイエスにおける出来事が、神の御業であることを表明した言葉。十字架に殺された無力さが逆説的に長老・祭司長・律法学者たちの「神」を相対化する必然。

４、「自分の十字架」。ある教会学校の女の子のエピソード。

ボンヘッファーはこのテキストの意味を「イエスが人を招く時、彼はその人に来て死ぬことを命ず」と表現した。初めの招きよりも、一歩踏み込んだ招きが。

５、知人の難波紘一さんと幸矢さん夫婦のこと。彼らは、二人が大学生の時、中国四国の学生ＹＭＣＡで知り合って結婚しました。結婚した直後、幸矢さんは「わたしは、あなたと結婚してよかった」と言った。それから何年かたち、夫の紘一さんは不治に病進行性筋萎縮症になる。二人は病のために、試練の長い長いトンネルをくぐる。多くの人の祈りに支えられ、今までの自分に死んで、自分の人生を神に捧げようという転機が訪れる。病状がすすんで、二人でできる神への奉仕、社会への奉仕の時間が残り少なくなって来た。実質的苦難は益々重く、死別が確実に近付くなかで、幸矢さんはあの懐かしい言葉をもう一度語る。「わたしは、あなたと、結婚して本当によかった」。新しい出発。

信仰生活には、「自分を捨て自分の十字架」を負うことで、再び「本当によかった」という言葉に浴する　恵みがある。